

■ 報告 ■

イタリアにおける剣道普及状況についての報告

ASSOCIAZIONE ITALIANA KENDO を中心に

浅見 裕*

(1989年12月7日受理)

Yutaka ASAMI

A Report on the Diffusion of Kendo in Italy

Centering Around "ASSOCIAZIONE ITALIANA KENDO"

イタリア共和国の剣道連盟の一つである ASSOCIAZIONE ITALIANA KENDO (略称 AIK) の招請を受け、1989年秋にイタリア北部の各地で6週間にわたる剣道指導にあたった。この国における剣道の組織や稽古について報告する。

イタリア全体では剣道人口は200~300人であり、AIKの所属者は80人くらいである。ヨーロッパにおいては、毎日が修行であり稽古は休まず続けるもの、という日本人的修行観は育ち難いと思えるのだが、AIKではスポーツとしての剣道ではなく、伝統的な「日本の剣道」を目標にしており、稽古を重視し求道的に取り組もうとしていた。

しかし、剣道の実技では、打突の機会について理合を無視した打ち込みと、腕力にたよった手の内の冴えない打撃動作が目立ち、全体的に足運びにスムーズさが欠けていた。

〔キーワード〕 剣道、イタリア、AIK、修行、稽古

I はじめに

イタリア共和国の剣道連盟の一つである ASSOCIAZIONE ITALIANA KENDO (略称 AIK) のマリオ・ボトニ会長からの招請を受けて、1989年9月26日に出発し11月6日に帰国するまで、40日間にわたって AIK 所属者に対する剣道指導にあたってきた。日本から7段教士の指導者を招請し、1ヶ月以上にわたって指導を受けるということは、AIKにとって今回が初めてのことであった。

* 岩手大学教育学部保健体育科

ポトニ会長によると、イタリア全体では剣道人口は200~300人くらいではないかということであり、AIKの所属者は、1989年は80人くらいであると言明していた。

イタリアで発行されている武道に関する雑誌(「BAZAI」や「SAMURAI」)によると、武道の中では柔道と空手が盛んで、その人口は10,000人くらいになり、その次がテコンドーとのことである。イタリアではこの3種目が盛んであり、あとはカンフー、合気道、柔術、剣道が同じようである。

この他、前述の雑誌には世界各地の格闘技なども掲載されているが、日本のものとしては、忍術というものまであり、黒装束姿の西欧人が手裏剣を構えた写真も掲載していた。これらの記事や写真の取り扱いでは、現在の日本でも剣術・柔術・忍術を使う「サムライ」や「ニンジャ」が実在していると思いかねない程である。

これらの雑誌の記事では、相手を倒すためのテクニックの紹介と、各大会のチャンピオンの紹介が多く、読者は「武道とは相手を倒す格闘技」という一面的な理解にとどまるのではないかと危惧を覚えたほどである。

このように剣道が普及していない国において、組織の問題や、剣道がどのように考えられているかについて、AIKのメンバーが語っていたことを中心に報告する。

II イタリアの剣道の組織について

イタリアには、剣道連盟に該当する組織が3団体ある。それらは「AIK」・「FIK」・「FENIKE」という略称で呼ばれており、それぞれの連盟について紹介する。

(1) AIK (ASSOCIAZIONE ITALIANA KENDO)

AIK(イタリア人は「アイカッパ」と発音)とは、1972年にイタリアでは最も早く創設された連盟であり、会長は前述のマリオ・ポトニ氏(4段、61歳、ミラノ在住)、副会長はルイジ・リゴリオ氏(初段、27歳、ガララーテ在住)、事務局長はロレンツォ・ザゴ氏(3段、28歳、ミラノ在住)である。前述のように80人程度の所属者だが有段者は20名足らずであり、その中でも初段の者が多く、指導者層が薄い連盟である。

ポトニ会長は、今から20年程前に40歳を過ぎてから剣道を習い始めたが、当時、イタリアでは剣道に取り組んでいる者はおらず、ポトニ会長がイタリアにおける開拓者となり、フランスの剣道家たちの協力も得ながら普及に努めてきた。

ポトニ会長は、英語やフランス語で出版されている剣道や居合道や日本の歴史などの著書をイタリア語に翻訳し、AIK会員に小冊子にして配布し、実技についてはばかりでなく文化的背景についても啓蒙している。

14・5年前には、日本人のナカジマ・ゴージ氏（当時6段）が2年間イタリアに住み、剣道用語についてのイタリア語の解説冊子を作成するのに尽力されており、AIKのメンバーはその冊子を持っているため、現在はイタリア人でも剣道用語については日本語の使用が可能となっている。

この連盟のメンバーがどんな態度・心構えで剣道に接しているかという点、

スポーツとしての剣道をやるのではなく、「日本の剣道」をやりたいのだ

と説明していた。

彼等の「日本の剣道」について抱いているイメージは、

伝統的な日本文化としての武道

であり、稽古を重視し求道的に取り組もうとしている。試合での勝利を目指して稽古をすることはスポーツであり、本来の稽古のあり方ではないはずである、と力説していた。

AIK以外の連盟については、紙数の制限から以下に概略を述べるに留める。

(2) FIK (FEDERAZIONE ITALIANA KENDO)

FIK（「フィッカ」と呼んでいる）は、イタリア国内においては、COMITATO OLIMPICO NAZIONALE ITALIANO（略称 CONI、イタリア・オリンピック委員会）から公認されている連盟である。

AIK 副会長のリゴリオ氏が語ってくれたところによると、そもそも CONI 自体が競技会において勝つことを目標にしており、CONI から公認されている（資金も得ている）団体である FIK としては、目標を「勝つこと」に置かざるを得ず、イタリアチームを勝たせることが一番の目的とのことである。

もし、日本の剣道指導者が FIK のチームを勝たせることができるのであれば、「日本の剣道」でも良いが、日本人の指導者は「勝つことを重視する」とは言わないので、FIK とすれば「日本」からは教えるつもりはないとのことである。

このような FIK だが、国際剣道連盟やヨーロッパ剣道連盟からは加盟を認められておらず、イタリア国内のスポーツの世界では、剣道界を代表する公認団体ではあるが、剣道の世界では孤立した団体となっている。

(3) FENIKE (FEDERAZIONE NAZIONALE ITALIANA KENDO)

FENIKE（「フェニケ」と呼んでいる）とは、それまで FIK に所属していた有力メンバーたちが、1988年に FIK から分裂して組織した新しい連盟である。この連盟は、ス

ポーツ剣道ではなく稽古自体を重視する剣道を実施しており、AIK と同じ仲間として交流（IVの項を参照）しているが、試合にも積極的に取り組んでいる。

たとえば、FENIKE は各種大会を主催することも多く、'89年のイタリア国内選手権大会や、イタリアのシシリー島のメッシーナで行われる国際剣道大会を主催し、ヨーロッパや韓国からチームを呼んで開催したりしている。このように FENIKE は生まれたての連盟だが、FIK の時代からの活動を引き継ぎながら、活発に対外試合にも取り組んでいる連盟である。

III AIK の剣道観（FENIKE との比較から）

リゴリオ氏の語ってくれたことによると、「FENIKE のメンバーが『ボトニ氏やAIK のメンバーは、試合をやっては駄目だ、試合はやりたくない、と言っている。』と述べることがあるが、それは我々の見解を正しく理解していない。我々 AIK は、試合は必要であるが、

試合が剣道ではなく、試合は剣道の修行の場の一つであり、剣道の一部にすぎない

のであって、いま以上に試合を重視するのは反対なのである」と述べており、また、「FENIKE では、ビギナーが『剣道とは何ですか。』と尋ねてくると、試合を見せて『これが剣道です』と示すことがあるようだが、それでは剣道とは試合をすることという観念を植え付け、競技剣道に疑いを持たなくなるだろう。剣道は競技の世界だけではないはずである。AIK としては、

伝統的な日本の剣道を求め、競技以外の面について重視している

のである。」とも語って、AIK と FENIKE との相違点を説明してくれた。

IV CIK という組織について

前述のように3つの連盟があるが、AIK と FENIKE で連合して、CIK（「チッカ」と呼ぶ。CONFEDRAZIONE ITALIANA KENDO）という連合組織を形成し、会長には AIK の会長でもあるマリオ・ボトニ氏が就任している。そしてこの CIK が EFK（ヨーロッパ剣道連盟）と IKF（国際剣道連盟）に加盟を認められており、1989年のヨーロッパ大会には、CIK の所属者として AIK と FENIKE のメンバーが混成してイタリアチームとして参加していた。

スポーツ団体ならば、CONIからの公認を得ることを考えるのが常識的なのだが、「CIKとしては、FIKを押しつけてまでCONIの一員になることは、かえってスポーツ剣道に墮落する危険性をはらんでおり、剣道修行にとって良くない事態になりかねないと考えている。現在はスポーツ団体としては亜流の位置にいるが、やがてはイタリアにおける剣道界はCIKが中心になるだろう」とリゴリオ氏は語っていた。

V 各地での剣道の活動状況

イタリアでは、初心者であっても防具をつける段階になれば、地稽古と掛かり稽古（打ち込み稽古）だけの練習をしており、技の練習を行うクラブはほとんど無いということを知られた。確かに各地での稽古では、男女を問わず、打突の機会を無視したようにひたすら単発的な技で打ち込むことが多く、相手との相互作用としての攻防が成立していない状況であった。

そこで筆者は、日本剣道形とそこに含まれる攻防の技術を中心に指導し、また、技術練習の順序性を示した一覧表（別表）を作成¹⁾・提示し、それら各技術の導入段階と発展段階のそれぞれについての練習方法も紹介してきた。

以下に、筆者の指導の日程を追いながら、各地の剣道クラブの実態と私見を述べる。

(1) トリエステにて（9/27～10/3）

成田空港を発ち、北イタリアのユーゴスラビアとの国境近くのトリエステという街に着いたのは、33時間後の9月27日の夜（現地時間）であった。その空港で筆者の剣道防具を入れたバッグが未着になっていたというハプニングが起き、その後、防具はカラチ空港にあることが判明したが、手元に届いたのは10日後であり、それまでAIKのメンバーが使用している防具・稽古着を借用しての指導となった。

イタリアで使用している防具は、台湾から輸入されているものが多く、日本でいうと中学校の授業用程度と思える機械刺しの廉価な防具であり、それを200ドルくらいで購入しているとのことであった。また稽古着も台湾製であり、丈が膝近くまである長い一重のものであり、袴はテトロン製のものを使っている者がほとんどであった。日本に行ったことのある者が、日本製の防具・稽古着を使用している程度であった。

竹刀については、MADE IN TAIWANの「倭櫻（ヤマトザクラ）」という商標のもので、ビニールで密封された完成品の竹刀を、22,000リラでローマで購入できるが、他の街ではそれが値上がりしてしまうとのことであった。

トリエステには、公共の体育施設である体育館（バスケットボール、バレー、ダンス、

別表

- ☆ KENDO-KIHON-DOSA(fondamento-movimenti)
 ・KAMAE(posizione)・ASHI-HAKOBI(gamba-mouvere)・SUBURI(brandire)・UCHI-KATA(colpo)・UKE-KATA(bloccare)・KIRIKAESHI(KIRI=tagliare,KAESHI=girare)
- ☆ KENDO-KIHON-WAZA(fondamento-tecniche)
 ○numerazione=esempio d'ordine per l'allenamento
- ★SCIO-dan(1-dan)
- * SIKAKE-WAZA(attaccare-tecniche)
 ①SEME(=entrare con la forza)→MEN
 ②SEME→KOTE,
 ③SEME→DO,
 ④SEME→TSUKI,
 NIDAN-WAZA(=deu bastonare-tecniche)
 ⑤MEN→MEN, ⑥KOTE→MEN, ⑦MEN→DO
 ⑧MEN→HIKIDO(HIKI=retrocedere), ⑨KOTE→DO
 SANDAN-WAZA(=tre bastonare-tecniche)
 ⑩MEN→MEN→DO, ⑪KOTE→MEN→DO, ⑫TSUKI→MEN→MEN,
 HARAI-WAZA(HARAI=scacciare lo shinai)
 ⑬HARAI-MEN, ⑭HARAI-KOTE,
 ⑮MEN→TAIATARI(=urtare corpo contro corpo)→HIKIDO(retrocedere)
 ⑯MEN→TAIATARI→HIKIMEN(retrocedere)
 ⑰MEN→TAIATARI→MEN(avanzare)
 DEBANA-WAZA(DEBANA=attaque sur intention d'attaque)
 ⑱DEBANA-MEN, ⑲DEBANA-KOTE,
- * OUJI-WAZA(contrattacco-tecniche)
 NUKI-WAZA(NUKI=colpire a vuoto)
 ⑳MEN-NUKI-DO, ㉑KOTE-NUKI-MEN,
 SURIAGHE-WAZA(SURI=strofinare, AGHE=alzare)
 ㉒KOTE-SURIAGHE-MEN
- ★2-dan
- * OUJI-WAZA(contrattacco-tecniche)
 SURIAGHE-WAZA(SURI=strofinare, AGHE=alzare)
 ㉓MEN-SURIAGHE-MEN, ㉔MEN-SURIAGHE-DO,
 ㉕TSUKI-SURIAGHE-MEN,
 KAESHI-WAZA(KAESHI=rovesciare)
 ㉖MEN-KAESHI-DO, ㉗KOTE-KAESHI-KOTE,
- ★3-dan
- * SIKAKE-WAZA(attaccare-tecniche)
 KATSUGHI-WAZA(KATSUGHI=caricare portando lo shinai sulla spalla)
 KATSUGHI-MEN, KATSUGHI-KOTE,
 JODAN-WAZA(JODAN=superiore, alzare le mani)
 MEN, KOTE, DO,
 KATATE-WAZA(KATATE=una mano)
 KATATE-MEN, KATATE-TSUKI,
- * OUJI-WAZA(contrattacco-tecniche)
 NUKI-WAZA(NUKI=colpire a vuoto)
 MEN-NUKI-MEN,
 SURIAGHE-WAZA(SURI=strofinare, AGHE=alzare)
 KOTE-SURIAGHE-KOTE,
 KAESHI-WAZA(KAESHI=rovesciare)
 DO-KAESHI-MEN, KOTE-KAESHI-MEN, KOTE-KAESHI-KOTE→MEN,
 UCHI OTOSHI-WAZA(UCHI OTOSHI=colpire lo shinai verso il basso)
 DO-UCHIOTOSHI-MEN, TSUKI-UCHIOTOSHI-MEN,

柔道、フェンシングなどの活動ができる各フロアがある)にて活動している「ケンドウカイ」という名称を持った剣道クラブ(9月は10人のメンバー、11月には14人に増加)があり、有段者はリーダーのクラウディオ・スフレッド初段だけであり、女性3人を含んだ初心者集団と言えるレベルであった。

ケンドウカイは、平常は週に2回の稽古(筆者の滞在中は連日)を行っており、稽古時間はいつも夜の8時から10時までの2時間であり、メンバーは勤めや大学の授業が終了後に集まってくる。道場として狭いフェンシング場を使っており、フェンシング用の金属板の床を脇に片づけ、硬い木の床のフロアでの稽古であった。

このトリエステという街は、イタリアの東端にありミラノからも遠いため(自動車でも4時間)、他のクラブとの交歓稽古が困難な所である。したがって、「ケンドウカイ」メンバーの剣道の技量は、本からの情報を頼りに自分たちで解釈しながら稽古をしていたため、間違った動作を行っていたり、応じ技についてはまったくできないという状態であった。

(2) ラベンナにて(10/4~10/10)

ラベンナでは、パレストラ・クラブという社会体育施設の一クラブである剣道クラブ(現在、4名のメンバー。有段者2名)があり、ダニエレ・バラディーニ4段がリーダーであった。バラディーニ4段は日本での外国人剣道指導者講習会に参加しており、このクラブでもその経験を生かし、日本での作法や礼法とまったく同様に行っていた。

普段は、ラベンナから80km離れたボローニャの街にある「一刀流クラブ」という名称の女性3人、男性1人の女性中心の剣道クラブと合同で、週に3回、互いの施設を交互に行き来して8人前後で稽古をしている。したがって、稽古時間は夜の9時から11時であり、その後には会食して解散するのが夜中すぎであり、帰宅が遅くなるという状況であった。

ラベンナの道場は、パレストラ・クラブにあるダンス場(壁が鏡張り、床は板張り)を使っており、ボローニャでは、バスケットコート大の広さを持つ、暗くて硬い板張りのフロアを使用していた。

四六時中、ここのメンバーと行動を共にしたが、彼等も「日本の剣道」をやりたいとのことであり、スポーツ剣道については批判的な見解を述べていた。また、ここでスタージェ(STAGE. 合宿・講習会)が行われ、9名前後の参加者であったが、それらの者も「日本の剣道」だからこそ求めようとしているのだと述べていた。

ラベンナのクラブ員だけでなくこのクラブでも、地稽古ではただひたすら攻撃的な打ち込みで筆者に挑んできたが、その打突は機会についての理合を無視した打ち込みであった。たしかに元立ち者に対して、先の打ち込みで自分の仕掛け技が通用するかどうかという気持ちで挑むこと自体は良いことであり、躊躇なくひたすら打ちかかってくる彼等の迫

方は、初心者クラスとはいえ立派なものである。

しかし、打突の機会を無視するということは、相手の心を読まないことでもあり、自分勝手な叩き合いに終始した稽古を行う者が多いとも言える。

(3) ガララーテにて (10/10~10/19)

ガララーテの剣道クラブは、「剣山道場」と銘打っており、生花の「剣山」のごとく、沢山の剣士が集まっている様子（来るように、という願いも）を表して名付けたとのことである。施設は、市立病院の老人医療センターの二階にある、リハビリ用のフロア（10m×20m）を借用しており、硬い科学物質の床の上で夜8時から10時まで週3回の稽古を行っている。

AIK 副会長であるルイジ・リゴリオ氏が、「剣山道場」のリーダーとして15名（女性2名、13歳の少年1名、他に大人の初心者4名を含んでいる）のクラブ員の指導にあたり、「剣山道場」には、リゴリオ氏（初段）の他に有段者は初段が2名いた。

AIK はイタリアでは最も早くから組織されていたが、現在では20歳台のメンバーが多くを占めている。一般的にイタリアでは、剣道を始めるのは大人になってからであり、このクラブのメンバーも技術練習においては、動きにスムーズさが欠けており、腕力にたよった打撃動作が目立っていた。

各地での筆者との稽古においても、ひたすら殴りつけるという表現がびったりするような打撃動作で打ち込んでくる者が多く、面打ちが外れた時に筆者の肩を強く叩いてしまうといった、手の内の冴えない技能レベルにある者がほとんどであった。これは、日本人であっても、大人になってから剣道を始めれば直面する問題である。ただ、外国人の初心者にとっては、日本語の発音の剣道用語を理解しがたいのと、良い動きのモデルを身近に見ることができないので、習得する上では苦勞が多く、進歩も遅れることになっていると思われる。

10/13にスイス国境に近いベルバニアという街へ、筆者にボトニ会長とリゴリオ副会長が同行したが、その街ではその日が生まれて初めて竹刀を持つという、いずれも英語も分からず、剣道用語についてもまったく予備知識のない5名の大人が待っていた。

同行した2人に英語からイタリア語への通訳を頼んだが、初心者に対する筆者の指導の手順（スキップから入る足運びの練習、ボール打ちから入る打ち方の導入など）を注目しており、時には5名の中に入って共に剣道導入段階の稽古に取り組んでもおり、指導方法に関心を寄せていたことがうかがわれた。

10/14・15の両日にミラノの東部のプレッシャでスタージェがあり、ここでのスタージェの2日目は、有段者のみの参加としていたので、審判法の練習をおこなった。

この時の判定の傾向では、有効打突は「気剣体一致」の時と認識していたが、その「気剣体一致」の時とは、右足踵で床を強く踏みつけ大きな音を立てた時と解釈している者が多く、手の内の確かさには気がつかず、相手の出てくる勢いを利用した、その場での冴えた手の内による素早い打撃などは、ほとんど一本としない傾向にあった。

また、引き技もまったくと言っていい程一本とせず、彼等自身の普段の稽古においても、有効打突になるような引き技を使えないこともあり、判断できないようであった。さらに、筆者が講習者で行った試合では、筆者があざやかに打撃した「面すり上げ面」や「面返し胴」などの素早い応じ技についても有効としないことがあった。特に「面すり上げ面」では、審判者は技を使ったことすら見抜けず、見ても見えないという状態であり、彼等の経験が不足していることがうかがえた。

(4) サンレモのスタージェにて (10/21・22)

サンレモでは、ジェゼッペとアンナマリアの夫婦（苗字は別々）だけが剣道の稽古に取り組んでおり、他にはクラブメンバーがいないとのことであったが、剣道クラブの名称を「ムショトク（無所得）道場」と名付けていた。

ジェゼッペとアンナマリアの夫婦を運営委員として、テント張りのバスケットボール場にて21日に講習会、22日はAIKのメンバーによる「第1回女子個人試合（8名参加）」、「男子有段者個人試合（11名参加）」、それに南仏チーム対AIK若手選抜チームの親善試合（7人制）からなる剣道大会と稽古会が開催された。

前述したように、AIKは試合・大会というものを重視することはないとのことだったが、ここではイタリアで初めてという女子の試合をメインにし、32名の参加者（南フランスからも10名）があった。街中にも大会ポスターが張り出され、サンレモの市長夫妻が観戦に来たりテレビの取材もあり、今後はサンレモでも二人の夫婦以外に剣道を始める者が出てくるかもしれないという淡い期待を持ったものである。

22日の大会では、筆者の滞在中に行われた各地のAIKのスタージェにいつも出席していた者が好成績を収め、女子では、パトリシア・アドジニ2段、男子ではリビオ・ランチニ初段が勝った。

この日の試合では、全般に単発技が多く、特に不慣れな者は同じ技の繰り返しに終始する傾向にあり、相手の打突動作が失敗に終わって動きが止まった所は打とうとせず、相互に構え合うまで待ってから同時に前に打ち込んでいくことの繰り返しが多く見られた。

有段者でも前に述べた「打突の機会」・「手の内の冴え」の不十分さは相変わらずだが、その他に気がついたこととして、前に出る技にのみ頼っており、引き技をほとんど出さず、出しても一本にできるような打撃と体のさばきができていなかった。これができたのは

2・3人しかおらず、全体的に足運びにスムーズさが欠けており、動きにダイナミックなところが見られない傾向であった。

(5) ベルガモについて (10/23~10/29)

ベルガモでは、エンツォ・レイディ 2段が8名からなる剣道クラブのリーダーであり、夜7時から9時まで、3名の有段者を中心として週4回の稽古を実施しており、男子4名(初心者1人)、女子は前述のパトリシア嬢などの4名が稽古に取り組んでいる。

ここでは、室内プールも完備している総合体育館の広いフロアを暗幕で区切り、室内アーチェリークラブとカンフークラブの活動に挟まれた狭いフロアで稽古をしていた。

今回のイタリアでの指導では、AIKのメンバーの力量から、鍛錬的な切り返しや、掛かり稽古の重複練習は行わない方針を立ててこれまで指導してきた。外国人でも、剣道が好きで夢中になっている者には、厳しい鍛錬的稽古方法を課しても頑張り通すであろうが、イタリアの各クラブには、まだ初心者段階に留まっている者が多く、剣道の魅力をまだ感じていない者すらいるようであった。このような段階の者に、鍛錬的練習方法を指示したら、すぐに翌日から稽古に来なくなってしまう恐れさえあった。

そこで、剣道の魅力の一つである、動きの美しさ、技の合理性を理解させることを狙いとし、無理なく誰でも取り組める導入段階を中心にして指導してきたのである。

ところが、ここのクラブの女性メンバーは、これまでのステージにも参加しており、筆者の指導を受けていたので、ここではとうとう岩手大学の授業時間の中で取り入れている導入ゲームの披露まで行った。

パトリシア嬢が言っていたが、イタリア人にとって元立ちに立った時が難しいとのことであった。即ち、いつも学ぶ(掛かる)立場についてしか教えられない為、ある有段者は、女性の初心者(防具をつけたばかり)に対して、右手前腕部が腫れ上がる程、小手打ちで強く叩いて(殴りつけて)おり、元立ちとしてどう使えばいいのかが分からないというレベルであった。

しかし、ここのクラブメンバーの学習意欲は目覚ましいものがあるので、今後も活発に稽古を続けて経験を積むであろうから、やがてはヨーロッパにおける「日本の剣道」を行う拠点の一つとなりうると思われる。

10/29の夜にトリエステに車で移動し、再び「ケンドウカイ」のメンバーと10/30~11/3までの連日2時間の稽古を行ない、11/4にガララーテに移動し、11/5にガララーテ近くの空港から帰国の途についたのであった。

VI おわりに

現在は、日本人と外国人の剣道の実力の差はかなり開いているが、これは小さい頃から毎日稽古をしている日本人と、大人から始めて、週に2・3度の稽古に留まっている外国人との稽古量の違いによるものであろう。日本人に熟達者が多いというのは、剣道ができる環境に育ち、そして連日でも剣道に取り組める職業がある（教員・警察官など）という日本独特の社会条件があるからこそ、剣道の熟達者が生ずるのであると言えよう。

一方、ヨーロッパでは社会条件が日本と大きく違っている。ヨーロッパでは、運動・スポーツというものはお金を払ってスポーツクラブに入っていくものであるし、その活動は仕事や学校が終わっての夜間に行っているのが一般的である。

ヨーロッパ人が、日常生活で重視しているものに家庭における夫婦関係があり、夫婦というものは常に一緒にいて愛情を表現し続けるものという観念を持っているようである。したがって、本来は家庭団欒の時間なのに、夜間に夫婦のいずれかがスポーツクラブに出ていくことは、家庭（夫婦関係）崩壊につながりかねず、剣道の稽古を連日連夜行うわけにはいかない、というのがヨーロッパ社会における現実のようである。

このようにヨーロッパにおいては、毎日が修行であり稽古は休まず続けるもの、という日本人の修行観は育ち難いと思える。また、ヨーロッパでも多くの剣道の大会が開催されており、試合で勝つことを修行の目的としても、他のスポーツ種目と対比してみれば当たり前のことになる。

そのような中で、「勝つこと」にとらわれず、剣道の修行を「稽古」中心に置いているAIKの方針は、勝負の結果にこだわるという弊害に汚染されることのない剣道を実施しているとも言え、ヨーロッパでは特異な連盟であると言えよう。

しかし、日本ではAIKの人々が期待しているような「日本の剣道」には添えないような試合重視の傾向もあり、「日本の剣道」は日本の若い人の間では不明瞭になっている。学校体育の場においても、有段者の教師が指導したとしても、これまで試合中心に鍛えられてきた教師であれば、勝負の結果で評価するような剣道指導を続けかねない。

このような日本の現状においては、「日本の剣道」を実践していると言い切れる道場は少ないと思われる。今後は、外国人の目標になっていることを自覚しながら、改めて剣道の歴史と変革の過程を問い直して「日本の剣道」のあるべき姿を明確にし、剣道の国際化に対応できるようにしなければならないと痛感した。